

KINGCA WEEK 2024, Master Class 参加報告書

国立がん研究センター中央病院
胃外科レジデント
藤崎 友梨奈

日本胃癌学会会員の先生方、いつもお世話になっております。この度は日本胃癌学会より参加助成をいただき、2024年9月23日～26日朝までの3日間+αのMaster Classおよび9月26日～28日に韓国ソウルで開催されましたKINGCA WEEK 2024に参加させていただきました。私は現在卒後6年目で、後期研修開始と同時に東京医科歯科大学(現 東京科学大学)消化管外科学分野に入局し、大学病院および関連病院で経験を積んだのちに、後期研修修了後の今年度2024年4月より国立がん研究センター中央病院の胃外科レジデントとして修練させていただいております。当院では海外からの留学生を数多く受け入れており、英語でのカンファレンスも開催されますが、自身の英語での発信力の低さを痛感しておりました。そんな中、KINGCA WEEKに参加経験のある当科の先輩医師より、今回の韓国での学会発表のお話をいただき、私にとって今回が初の海外発表であり不安な部分も大きくはあったものの、自身の糧になると確信したため、思い切って合わせてMaster Classも参加することにしました。

Master Class

Master ClassはSeoul National University Hospital (SNUH)のGastrointestinal Surgery Divisionに幸運にもマッチすることができました。同期間での見学者は名古屋大学の杉田静紀先生、イタリアからの2名の計4名で、そのほかドイツからのインターン学生やアメリカからの見学者もいらっしゃいました。韓国では集約化が進んでおり、SNUHでは年間1000件もの胃癌手術が施行されていましたが、今年2月に発生した研修医によるストライキの影響で手術件数が年間800件ベースまで減少しており、研修医も1名しかおらず、必然的にフェローの先生方にも業務の皺寄せが来ている状況とのことでした。

Master Classでは主に手術見学をさせていただきました。稼働している手術室は現在26あり、科によって決まった手術室を使用し、第一助手がフェローの先生、第二助手が固定のNPさんで構成されており業務の効率化が図られていました。特にNPさんは、執刀前のコード類を手際よく配置したり、腹腔鏡手術のカメラワークが見事であったり、ロボット手術での鉗子交換だけでなく指示がなくてもステープラーなどの器材を準備できていたり、医師に臆せず意見を言ったりと、非常に驚かされる場面が多くありました。韓国も日本と同様に外科志願者が減少している中、またストライキの影響で手薄な中、より重宝される存在と感じました。手術は執刀医であるスタッフの先生が手術室に来られるまでは第一助手のフェローの先生が執刀できるというスタイルでした。見学した手術はRDG 2件、RPPG 1件、RPG

1 件、LDG 1 件、LTG 1 件、Lap G-J bypass 1 件の計 7 件で、偶然にも胃切除はすべて早期胃癌でした。手術の内容は日本と大きな違いはありませんでしたが、日本のように神経外側の層で必ずしも剥離を進めるといった訳ではなく、ロボット手術ではほとんどベッセルシーラーを用いて剥離や切離を行い、各術式の再建方法は術者に委ねられているといった点が印象に残っています。また PPG に多く取り組んでおり、Prof. Lee より適応や手術方法について解説いただきました。手術室の壁には日本の胃癌取り扱い規約のリンパ節番号と定義のページが貼付されており、嬉しく思いました。また手術室内にある病理室や執刀医による術後の家族への IC も見学させていただきました。

そのほか MDT カンファレンスやリサーチミーティングなども参加させていただきましたが、すべて英語で進行されており、韓国人の英語力の高さに驚かされるばかりでした。これまで自施設で留学生を迎えるという立場しか経験したことはありませんでしたが、今回初めて外国人見学者として対応され、共通言語で対応されることのありがたさを実感しました。帰国後の現在はなるべく留学生とコミュニケーションを取れるよう努めており、自分の姿勢に変化をもたらす経験となりました。また、2 日目と 3 日目の夕食は嬉しいことに welcome party を開催いただき、SNUH の先生方や見学者の先生方と親睦を深めました。

KINGCA WEEK 2024

学会は明洞にあるロッテホテルソウルで開催され、私は oral presentation で“Necessity of splenectomy for the antral type of scirrhus gastric cancer”を発表させていただきました。幽門型と胃体部型のスキルス胃癌について各ステーションの郭清効果インデックスを比較し、脾摘の必要性について検討したものです。私にとって初の英語での学会発表で、他のプレゼンターの英語力の高さに圧倒され、結果としては恥ずかしながらしどろもどろな質疑応答となり悔しくも充実した発表となりました。SNUH のフェローの先生や Master Class でご一緒した先生方も発表に駆けつけてくださいました。学会はすべて英語での発表であることもあり、世界各地からの発表が多数あり、会場はそこまで大きくないものの非常に活気があり刺激的でした。Master Class から連続し学会参加できたことで非常に満足度の高い韓国出張期間となりました。

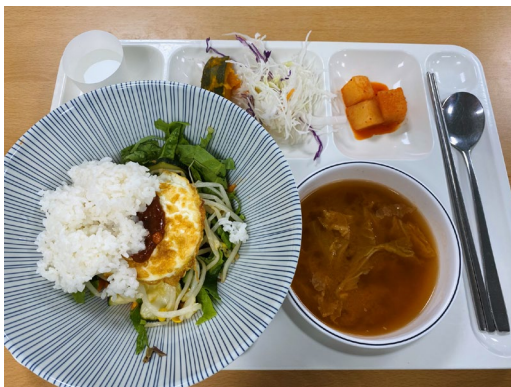
最後になりますが、今回このような機会をいただきました日本胃癌学会理事長 掛地吉弘先生、国際委員会委員長 竹内裕也先生、前理事長 小寺泰弘先生、日本胃癌学会の関係者事務局の皆様にも厚く御礼申し上げます。また、研究指導に尽力いただきました国立がん研究センター中央病院胃外科科長 吉川貴己先生はじめスタッフの皆様にも重ねて感謝いたします。



朝の SNUH main building



手術室にて Han-Kwang Yang 教授（左端）と SNUH 見学者の先生方との一枚
筆者は左端から 2 番目



あらゆるものが辛い手術室内の職員専用食堂のランチ



Welcome party での温かいおもてなしの写真



KINGCA WEEK 2024 での筆者の発表風景



会場での記念写真 左から Prof. Lee (SNUH)、掛地吉弘先生、筆者、Dr. Fedrica (Master Class 参加者)、フィリピンからの短期フェローの先生、吉川貴己先生